

石勒十八騎考

——後趙政権の基礎的理解に向けて——

小 野 響

はじめに

五胡十六国時代は、中国史上において漢と唐という二つの帝国の間に位置する時代である魏晋南北朝時代の一部であり、この時代は漢唐両国の制度・文化・その他あらゆるものの変化を考える際には、必ず考慮しなければならない時代である。特に、三国時代以降、胡族¹⁾が中原地域にも数多く居住するようになり、かかる新たな社会情勢に対して、漢帝國的体制では充分に対応できなかった。この課題の解決が魏晋南北朝時代に求められていたと言える。

かつて谷川道雄氏は、五胡・北朝時代の研究を隋唐時代の理解の延長と位置づけ、五胡・北朝諸国についての論考を含めた諸論文を『隋唐帝国形成史論』の名のもとに一冊にまとめた²⁾。これは五胡十六国時代が、唐代に至るまでの中国史の展開の中で、重要な意義を持つという事を示している。五胡十六国時代の出現は、漢的世界帝国の一つの極限を示すものと理解すべきであるとされ、隋唐時代への起点と見做される³⁾。例えば日本における中国学の碩学内藤湖南は、『支那上古史』において中国史の時代区分を行い、歴史開闢から後漢までを「上古」、後漢から西晋までを「過渡期」、五胡十六国時代から唐までを「中世」と述べた⁴⁾。即ち、五胡十六国時代は漢帝国崩壊後に漢を克服する新たな社会が求められた時の起点となる時代なのであり、その社会は唐帝国にまで繋がる。

また、唐帝国を「拓跋国家」⁵⁾と見做し、その胡族的要素を強調する視点に立つ場合、始めて中原地域に胡族国家を建てた五胡十六国は、唐帝国の起点に相応しいと言えるだろう。その意味において、五胡諸国家出現の意義の一つは、胡族勢力を軸として中国社会を統一ある政治世界に再編成していこうとする歴史の動向の第一歩をふみ出したことに置かれるべきであり、五胡十六国時代以降の南北朝隋唐の時代というのは、胡漢両世界統合の過程であると認識されてきた。要するに、五胡十六国時代は「漢帝国の克服」と「唐帝国への起点」という大きな歴史的役割を担っている時代なのである。そしてそこには「融合の時代」と呼ばれるような胡漢の融合があった⁶⁾。

上記の問題意識を踏まえれば、国家成立過程における集団形成を分析する事は、胡漢両種族が混在していた当時の社会における胡漢融合の形成を明らかにする事に繋がる。そこには漢帝国の限界を打破し、唐帝国の起点となるべきすがたが現れているはずである⁷⁾。ここで注目すべきは石勒である。この石勒は、一度は奴隸として身を売られる事まで経験し、尚且つ胡族という華夷の概念において劣勢に置かれる身の上ながら、皇帝にまで上り詰めた人物である。従って彼には何ら部族的背景が存在しないのであり、彼の建国した後趙の形成過程には、五胡十六国時代の社会状況が直接的に反映すると見做し得る。

かかる後趙の重要性を反映するように、石勒や彼の建国した後趙に対する研究は少なくない⁸⁾。それを踏まえつつ、今問われるべき問題は、文字通り身一つで立身出世した石勒は如何にして自身の

勢力を拡大していったのか、換言すれば後趙建国の過程において如何なる人的結合が行われたのか、という事である。そこで注目すべきは、雷一九九四、陳勇二〇〇九、小野二〇一四等多くの後趙研究が指摘する石勒十八騎である⁹⁾。この石勒十八騎とは、石勒草創の臣というべき存在であり、羣盜時代の石勒と行動を共にしていた人々である。

『晋書』卷一百四 石勒載記上¹⁰⁾

遂に王陽・夔安・支雄・冀保・吳豫・劉膺・桃豹¹¹⁾・遼明等八騎を招集し羣盜と爲る。後に郭敖・劉微・劉寶・張暄僕・呼延莫・郭黑略・張越・孔豚・趙鹿・支屈六等も又た之に赴き、號して十八騎と爲す。¹²⁾

彼らはいったい如何なる人々であったのだろうか。石勒と共に羣盜となっているから、やはりそう高い身分の人ではなかっただろう事は容易に想像がつく。しかし、先行研究では彼らの種族的出自が検討されるに止まり、彼らそのものに対する言及、特に如何なる活躍をし、如何なる地位にあったのか、そして如何なる形で後趙とコミットしていたのか、については等閑視されていると言っても過言ではない。また彼らに関する専論は管見の限り見当たらない。そこで本論は、彼らに関する史料を蒐集し、石勒十八騎に対する基礎的な分析を加える。そして、その分析結果に基づいて、後趙政権の性格について考察を行いたい。

一、石勒十八騎の個別的分析

以下に石勒十八騎と呼ばれる十八名について、個人単位で分析を加えていく。個別具体的な史料については論文末尾に【石勒十八騎関連史料表】を附したので、適宜参照されたい。

(1) 王陽

(1-a)を見ると石勒は「胡の王陽等十八騎と汲桑に詣り左前督と爲る」とあり、王陽が「胡」である事が判明する。石勒に仕えて以降、王陽は將軍としての活動だけでなく、訴訟の担当等の文事にも携わっている(1-b)(1-c)(1-d)。そして石勒の後継者たる石弘と密接な関係を持ち、石弘の与党であった徐光を登用したのも王陽であった(1-e)(1-f)(1-g)。

石勒死後の動向は不明であるが、人間関係から考えれば、太子石弘と権臣石虎の対立の時には、石弘派に与したであろう¹³⁾。温二〇一六は、王陽を後趙の胡族武力集団の有力者と見做すが、後趙における重要人物である事は疑いないものの、その影響力の対象に「胡族」を強調するのは疑問である。すでに小野二〇一四で指摘した通り、石勒死後の石弘と石虎の闘争は、種族的背景を持たず、政治的な動機に端を発するものであった。従って筆者は、王陽は後趙における石弘派の重要人物であったとのみ理解したい。

また唐二〇一〇は烏丸である可能性を指摘し、雷一九九四は烏丸と認定するが、明証に欠けるため、本稿においては「胡」である以上の断定は避ける。

(2) 夔安

夔安は元々天竺から遼東へ移って来た一族であり、彼の末裔は後秦や後燕といった別の五胡諸国に仕えている (2-a)。石勒に仕えて以降は、将軍としての活動だけでなく、尚書系列の諸官をも歴任している (2-b) (2-c) (2-d) (2-e) (2-f) (2-g) (2-h) (2-k)。そして石勒死後は一貫して石虎の与党である (2-i) (2-j)。また特徴的なのは東晋の天文記録に登場している事である (2-l)。

同じ十八騎であっても石勒の死後、太子石弘と魏王石虎に分かれ政治的闘争を繰り広げているのは既に述べた。上述の王陽と好対照をなすように夔安は石虎に与し、太保にまで昇進している (2-a)¹⁴⁾。また『資治通鑑』に死亡記事がある事が注目される。

『資治通鑑』卷九十六 成帝咸康六 (三四〇) 年条

趙の尚書令夔安 卒す。¹⁵⁾

これは五胡諸国の大臣クラスとしては異例の待遇であり、また東晋の天文記事にも名前が登場する事から、彼が東晋にもその名を知られていた事が看取される。

(3) 支雄

支雄は月支であり (3-a)、石勒に仕えて以降、将軍としての活動だけでなく、訴訟の担当等の文事にも携わっている (3-b) (3-c) (3-d) (3-e) (3-f) (3-g) (3-h)。彼の末裔の墓誌を見れば、本貫は瑯邪と思われる (3-j) (3-k)。

石虎期に司空・始安郡公にまでなっている事から (3-j) (3-k)、おそらく石勒死後は石虎派だったと思われる。同じく (3-j) (3-k) において支雄は唐代において先祖に比定されているが、真であれば彼の子孫の継続性が、偽であれば彼を先祖に設定する事の利点が唐代に存在した事が伺われ、どちらにせよ支雄の存在感を強める史料であろう。

(4) 冀保

十八騎となる以外の詳細は不明である。

(5) 呉豫

石勒が開府した時に、将率となる (5-a)。

(6) 劉膺

十八騎となる以外の詳細は不明である。劉膺について、唐二〇一〇は匈奴あるいは西域胡である可能性を指摘し、雷一九九四、陳勇二〇〇九は匈奴とするが、いずれも明証を欠く¹⁶⁾。

(7) 桃豹

范陽の出身であり (7-a)、石勒に仕えて以降は、将軍としての活動が中心である (7-b) (7-c) (7-d) (7-e) (7-f) (7-g) (7-h)。そして後世において「趙の勳臣」と認識されている点は注目すべきだろう (7-j)。

石虎時代に太保まで出世している事から (7-i)、おそらく石勒死後の政治闘争では石虎派に属して

いたと思われる。『資治通鑑』に死亡記事のある稀有な存在であり (7-i)、彼が当時重要な存在であった点が看取される。子孫が北燕の領域に居る事から、後趙滅亡後、「中州」に居た他の「勳臣」の末裔とは違って、一族は本貫地に帰ったと理解すべきだろう。

(8) 遼明

将軍としての活動が中心だが (8-a) (8-b) (8-c) (8-d)、石虎期では目立った活躍がない。しかし、(8-e) を見れば、将軍ではなく君主側近として活動している事が確認できる。内勤に移ったが故に、史料上で活動が確認できないのだろうか。また地名に名を残しているという事は、彼が地域の記憶に残る行政手腕を持っていた事を示している (8-f)。

(9) 郭敖

石勒に仕えて以降、左長史、尚書左僕射等文事関係中心の官歴を歩む (9-a) (9-b)。石虎期に一軍の将としての活躍が見られるが、精彩を欠く (9-c)。彼は十八騎内において異色の文事関係中心の官歴を有するが、石虎期の失態に鑑みれば、石勒に将才を高く評価されていなかったからであろうか。

(10) 劉徴

敦煌出土の p.2586 『晋紀』 (10-f) を見ると「晋人は則ち程遐、徐光、朱表、韓攬、郭敬、石生、劉徴なり。」とあり、晋人 (即ち漢人) である事が確認できる。石勒に仕えて以降、地方官中心の官歴を歩むも、軍事行動への参加もしばしば見られる (10-a) (10-c) (10-d)。石弘の教師役を引き受けているが、石虎期にも太守となっている (10-b) (10-e)。

十八騎が胡漢両集団の人物から構成されていた事を示す人物。桑虞の登用等、後趙と漢人のパイプ役を担っていた可能性もある。唐二〇一〇は匈奴あるいは西域胡である可能性を指摘し、雷一九九四、陳勇二〇〇九は匈奴とするが、いずれも明証を欠く。ここは (10-f) から漢人であると理解したい。

(11) 劉宝

十八騎となる以外の詳細は不明である。劉宝について、唐二〇一〇は匈奴あるいは西域胡である可能性を指摘し、雷一九九四、陳勇二〇〇九は匈奴とするが、いずれも明証を欠く。

(12) 張暄僕

十八騎となる以外の詳細は不明である。張暄僕について、姚二〇〇七、雷一九九四、陳勇二〇〇九は羯であると見做すが、いずれも明証を欠く。

(13) 呼延莫

石勒が開府した時に、将率となる (13-a)。呼延莫について、雷一九九四、陳勇二〇〇九等は姓を手掛かりに匈奴であると断定する。呼延姓である事から、匈奴と関係が深い人物であるのは間違いない¹⁷⁾。

(14) 郭黒略

郭黒略は石勒と仏図澄を結び付けた人物であり(14-a)、石勒の下では将軍としての活動が中心であった(14-a)(14-b)。彼は仏図澄に死地を救われており、両者の関係は良好であったようだ。馬二〇〇六は仏図澄との交流から、夔安を含めた三名がみな天竺人であったと指摘する。郭黒略については明証を欠くものの、夔安と仏図澄は天竺人乃至その末裔¹⁸⁾であり、(2-e)のように、夔安が使者として仏図澄を訪れている事も確認できる。後趙における天竺人集団が存在したとすれば、仏教や当時の華北の種族分布を見る上で重要な示唆を持つ。

(15) 張越

(15-a)を見ると「勒の姉夫の廣威の張越」とあり、石勒の義兄である事が分かる。姚二〇〇七と雷一九九四は張越を羯であると見做す。雷氏は石勒の姉を娶っている事をその論拠としているが、石勒の太子石弘の母は漢人であり¹⁹⁾、皇后の劉氏は匈奴である為²⁰⁾、姉の夫が石勒と同族の羯であるはず、というのはやや論理に飛躍があると思われる。婚姻は勢力拡大の為の重要な手段の一つであり、有力な部族的背景を持たない石勒が、婚姻を特定種族に限るとは考え難い。即ち石勒の義兄である張越は、羯であるかもしれないが、他種族の可能性もあるという事である。筆者は先行研究の如く彼を羯であると断定する根拠として、婚姻関係は甚だ弱いものであると考える。従って本稿では、彼の出身種族は不明と理解する。

(16) 孔豚

十八騎となる以外の詳細は不明である。「豚」という名前から判断すると胡族と思しく、陳勇二〇〇九も胡人であると指摘するが、明証を欠く。

(17) 趙鹿

趙鹿は後趙の最末期まで生き抜き、太宰にまで登った(17-a)(17-b)。後趙政権における具体的な活躍は不明ながら、後趙の全ての君主に仕えた。その経歴を買われて太宰にまで上り詰めたのだろうか。なお姚二〇〇七は趙鹿を匈奴であると見做すが、明証を欠く。

(18) 支屈六

月支であるから(18-a)、支雄とは同族であろう。また、

『晋書』卷一百四 石勒載記上

石季龍 張敬・張賓・左右司馬の張屈六・程遐文武等一百二十九人と上疏して曰く「(略)」と。²¹⁾

という『晋書』の記事について、清人の周家祿による『晋書校勘記』は「張屈六は即ち十八騎中の支屈六なり。支と張とは聲轉の誤なり」²²⁾とする。そうであれば、支屈六は石勒の左司馬を務めていた事が分かる。

二、後趙における石勒十八騎の位置づけ

まず石勒の臣下としての十八騎に注目してみよう。当然ながら、石勒との関係ありきで後趙に出仕している。そのため、石勒期では、それぞれが自身の能力を活かして仕えていたが、石勒の死後には石弘派と石虎派に分かれて相克した。かつて筆者は、小野二〇一四で石勒由来の結束を有していた後趙の臣下は、石勒の死後その中核を失い分裂する事を指摘した。建国の元勳ともいべき石勒十八騎においても、それは例外ではない事が確認された。即ち、十八騎と石勒の関係は個人対個人のものであるのであって、「十八騎」という集団が存在するのではない。このように十八騎を理解すれば、彼らが「十八騎」としてまとまりのある行動をとっていない事もまた容易に理解できよう。

次に石虎時代の十八騎を見てみると、石虎登極以降は、石虎に与した十八騎は順調に出世をした事が注目される。特に夔安は石虎即位の勸進の筆頭に記され、有力な大臣の一人として存在感を示している。また、北燕から「趙の勳臣」と認識されていた桃豹も目を引く。この二人は個人の分析の部分でも述べたが、『資治通鑑』に死亡記事があり、これは十八騎内のみならず、五胡諸国の大臣クラスの人物としても異例である。この点からも、彼ら二人の後趙における重要性が垣間見える。

石勒の十八騎であった彼らの一部は、石虎の時代にも将領として活動しているが、却って遼明等のように石虎に誅殺された人物もあり、石虎との関係は十八騎それぞれが個人的に結んでいたものであると解すべきだろう。遼明のように石勒期には將軍であったのに石虎期には側近へ移った人物もいれば、その逆に郭敖のように石勒期には尚書左僕射等を歴任していたのに石虎期には將軍として起用される人物もいた。これは石勒と石虎が彼らに期待した役割の差であると言えるだろう。

後趙の官僚機構は、五胡十六国時代が乱世であるが故に、完成されたシステムティックなものであったとは考え難い。しかし、文武の役割分担の表象としては機能していただろう。なんとなれば、これすらも機能しないのであるなら、官僚機構の存在意義そのものが問われるからである。そうであるならば、後趙の官僚機構はその名称と共に、実際の就任者の動向から反射させる事に拠って、その実体を把握し得ると言える。従って、十八騎の担ってきた役割を見ていく事は、後趙官僚機構の機能を浮かび上がらせる事に繋がり、考察の手掛かりとなるだろう。

そして、十八騎の構成について言えば、胡漢両種族を包括した集団であり、また史料的に確認できる範囲では羯は存在しない。石勒の草創期を支えていたのが、出自ではなく石勒個人との人間関係に依拠して集められた十八騎である事は、後趙政権の理解に大きな示唆を与えるものであろう。ここから考えれば、雷一九九四の言うような十八騎が雑胡の集合だと看做す事には賛同できない。

以上を要するに、十八騎は集団の「名称」ではあれども、集団としての「実態」はなかった。即ち十八騎とは、「榮譽ある称号」に近いものではなかったかという推定も成り立ち得るだろう。

むすびにかえて

石勒の飛躍を支えた石勒十八騎は石勒の股肱と呼ぶべき存在であり、後趙建国以前の石勒軍団において、中核を担う存在であった事は疑いない。それは建国後も武事文事問わず活躍した十八騎がいた事からも推察される。しかし、石勒の死後は、石弘派と石虎派に分かれた。また石虎に仕える

事に依って栄達した十八騎もいれば、却って石虎に誅殺されてしまった十八騎もいた。即ち、彼らは石勒十八騎と呼ばれる集団であったものの、その実体はなく、それぞれ個人として石勒と君臣関係を結んでいたのである。そして石勒の死後は、改めてそれぞれが石弘や石虎を君主と仰いでいるのである。

上記の理解に基づけば、彼らもまた石勒による個人的人間関係の帰結である後趙²³⁾を体現している存在と言える。そして、斯様な人的結合は、石勒の死を契機として解体するのは自明である。即ち、石勒死後の石弘と石虎の抗争は、石勒という英雄的カリスマの死後の混乱を如何に収拾するかという課題を抱えていた。そこで、第二の英雄的カリスマ石虎によって、第一の英雄的カリスマの指定した後継者石弘の排除と、後趙の再統一が行われた。ここに後趙王権の性質が端的に表れていると言える。要するに、後趙においては、英雄的カリスマを持つ個人による支配が強く要請されていたのである。ここに後趙の国家体制の特徴が看取される。

但し、石勒個人の人的結集としての後趙を象徴する十八騎の構成員が、胡族だけではない事を踏まえれば、上記の後趙の国家体制の特徴は、必ずしも「胡族的体制」に帰納されるべきものではない。部族的背景を持たない石勒の人間集団形成は、胡もしくは漢のどちらか一方への偏在はなく、出自に基づいた規制は見られない。むしろ石勒が相対した当時の社会構造に強い規制を受けたものと見做さざるを得ない。即ち、漢帝国崩壊後、胡族の中原居住者が増加した三国時代以降の社会と統合する新たな体制の胎動が、ここに看取されるのである。本報告の結論を踏まえた、後趙全体の国家体制の解明、及び後趙の国家体制が如何にして後代に受け継がれていったのか等の問題については、今後の課題としたい。

【石勒十八騎関連史料表】

以下に石勒十八騎に関連する史料を提示する。煩瑣を避けるため、それぞれ引用史料は一つに止め、他の史料に同様の記事が有る場合は、注釈に書名を記すのみとする。但し、表に示した史料と注引した史料間で特に異動がある場合は、注引史料の原文も載せた。また、表中「記事」内にゴシック体で記されているのが、十八騎の成員である。

(1) 王陽		
番号	史料	記事
(1-a)	『世説新語』識鑒第七 注引『石勒伝』	永嘉初、豪傑並起、與胡 王陽 等十八騎詣汲桑爲左前督。
(1-b)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ²⁴⁾	元海授勒安東大將軍・開府、置左右長史・司馬・從事中郎。進軍攻鉅鹿・常山、害二郡守將。陷冀州郡縣堡壁百餘、衆至十餘萬、其衣冠人物集爲君子營。乃引張賓爲謀主、始署軍功曹、以刁膺・張敬爲股肱、 夔安 ・孔萇爲爪牙、 支雄 ・呼延莫・ 王陽 ・ 桃豹 ・ 遼明 ・ 吳豫 等爲將率。

(1-c)	『晋書』卷一百五 石勒載記下 ²⁵⁾	太興二年、勒偽稱趙王、赦殊死已下、均百姓田租之半、賜孝悌力田死義之孤帛各有差、孤老鰥寡穀人三石、大酺七日。依春秋列國・漢初侯王每世稱元、改稱趙王元年。始建社稷、立宗廟、營東西宮。署從事中郎裴憲・參軍傅暢・杜嘏並領經學祭酒、參軍續咸・庾景爲律學祭酒、任播・崔潛爲史學祭酒。中壘 支雄 ・遊擊 王陽 並領門臣祭酒、專明胡人辭訟、以張離・張良・劉羣・劉謨等爲門生主書、司典胡人出內、重其禁法、不得侮易衣冠華族。號胡爲國人。
(1-d)	『晋書』卷一百五 石勒載記下	時祖逖卒、勒始侵寇邊戍。勒征虜石他敗王師于鄆西、執將軍衛榮而歸。征北將軍祖約懼、退如壽春。勒境內大疫、死者十二三、乃罷徽文殿作。遣其將 王陽 屯于豫州、有闕關之志、於是兵難日尋、梁鄭之間騷然矣。
(1-e)	『晋書』卷一百五 石勒載記下 ²⁶⁾	勒既將營鄆宮、又欲以其世子弘爲鎮、密與程遐謀之。石季龍自以勳效之重、仗鄆爲基、雅無去意。及修構三臺、遷其家室、季龍深恨遐、遣左右數十人夜入遐宅、姦其妻女、掠衣物而去。勒以弘鎮鄆、配禁兵萬人、車騎所統五十四營悉配之、以驍騎領門臣祭酒 王陽 專統六夷以輔之。
(1-f)	『晋書』卷一百五 石勒載記下石弘附伝	弘字大雅、勒之第二子也。幼有孝行、以恭謙自守、受經於杜嘏、誦律於續咸。勒曰「今世非承平、不可專以文業教也。」於是使 劉微 ・任播授以兵書、 王陽 教之擊刺。立爲世子、領中領軍、尋署衛將軍、使領開府辟召、後鎮鄆。
(1-g)	『太平御覽』卷二二〇 職官部一八 中書令 所引『十六国春秋』後趙錄 ²⁷⁾	徐光字季武、頓丘人。幼有文才、年十三、 王陽 攻頓丘、掠之、而令主秣馬、光但書柱作詩賦。左右以白石勒、勒令召光、付紙筆、光立爲頌。賜衣服、遷爲中書令。

(2) 夔安 ²⁸⁾		
番号	史料	記事
(2-a)	『古今姓氏書弁証』卷三 夔氏	石虎有太保 夔安 、自天竺徙遼東。玄孫逸姚秦司空、騰仕後燕。
(2-b)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ²⁹⁾	元海授勒安東大將軍・開府、置左右長史・司馬・從事中郎。進軍攻鉅鹿・常山、害二郡守將。陷冀州郡縣堡壁百餘、衆至十餘萬、其衣冠人物集爲君子營。乃引張賓爲謀主、始署軍功曹、以刁膺・張敬爲股肱、 夔安 ・孔萇爲爪牙、 支雄 ・呼延莫・ 王陽 ・ 桃豹 ・遼明・吳豫等爲將率。

(2-c)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ³⁰⁾	勒於葛陂繕室宇、課農造舟、將寇建鄴。會霖雨歷三月不止、元帝使諸將率江南之衆大集壽春、勒軍中飢疫死者太半。檄書朝夕繼至、勒會諸將計之。右長史刁膺諫勒先送款於帝、求掃平河朔、待軍退之後徐更計之。勒愀然長嘯。中堅 夔安 勸勒就高避水、勒曰「將軍何其怯乎。」孔萇· 支雄 等三十餘將進曰「及吳軍未集、萇等請各將三百步卒、乘船三十餘道、夜登其城、斬吳將頭、得其城、食其倉米。今年要當破丹楊、定江南、盡生縛取司馬家兒輩。」勒笑曰「是勇將之計也。」各賜鎧馬一匹。
(2-d)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ³¹⁾	廣平游綸·張豺擁衆數萬、受王浚假署、保據苑鄉。勒使 夔安 · 支雄 等七將攻之、破其外壘。浚遣督護王昌及鮮卑段就六眷·末杯·匹碑等部衆五萬餘以討勒。
(2-e)	『晋書』卷九十五 佗囙澄傳 ³²⁾	鮮卑段末波攻勒、衆甚盛。勒懼、問澄。澄曰「昨日寺鈴鳴云、明旦食時、當擒段末波。」勒登城望末波軍、不見前後、失色曰「末波如此、豈可獲乎。」更遣 夔安 問澄。澄曰「已獲末波矣。」時城北伏兵出、遇末波、執之。澄勸勒宥末波、遣還本國、勒從之、卒獲其用。
(2-f)	『晋書』卷一百五 石勒載記下 ³³⁾	勒羣臣議以勒功業既隆、祥符並萃、宜時革徽號以答乾坤之望、於是石季龍等奉皇帝璽綬、上尊號于勒、勒弗許。羣臣固請、勒乃以咸和五年僭號趙天王、行皇帝事。尊其祖邪曰宣王、父周曰元王。立其妻劉氏爲王后、世子弘爲太子。署其子宏爲持節·散騎常侍·都督中外諸軍事·驃騎大將軍·大單于、封秦王。左衛將軍斌太原王。小子恢爲輔國將軍·南陽王。中山公季龍爲太尉·守尚書令·中山王。石生河東王。石堪彭城王。以季龍子邃爲冀州刺史、封齊王、加散騎常侍·武衛將軍。宣左將軍。挺侍中·梁王。署左長史 郭敖 爲尚書左僕射、右長史程遐爲右僕射·領吏部尚書、左司馬 夔安 ·右司馬 郭殷 ·從事中郎李鳳·前郎中令裴憲爲尚書、署參軍事徐光爲中書令·領祕書監。論功封爵、開國郡公文武二十一人、侯二十四人、縣公二十六人、侯二十二人、其餘文武各有差。
(2-g)	『晋書』卷一百五 石勒載記下石弘附傳 ³⁴⁾	弘策拜季龍爲丞相·魏王·大單于、加九錫、以魏郡等十三郡爲邑、總攝百揆。季龍偽固讓、久而受命、赦其境內殊死已下、立季龍妻鄭氏爲魏王后、子邃爲魏太子、加使持節·侍中·大都督中外諸軍事·大將軍·錄尚書事。宣爲使持節·車騎大將軍·冀州刺史、封河間王。韜爲前鋒將軍·司隸校尉、封樂安王。遵齊王、鑒代王、苞樂平王。徙太原王斌爲章武王。勒文武舊臣皆補左右丞相閑任、季龍府僚舊昵悉署臺省禁要。命太子宮曰崇訓宮、勒妻劉氏已下皆徙居之。簡其美淑及勒車馬·珍寶·服御之上者、皆入于己署。鎮軍 夔安 領左僕射、尚書郭殷爲右僕射。

(2-h)	『晋書』卷一百六 石季龍 載記上 ³⁵⁾	咸康元年、季龍廢勒子弘、羣臣已下勸其稱尊號。季龍下書曰「王室多難、海陽自棄、四海業重、故俛從推逼。朕聞道合乾坤者稱皇、德協人神者稱帝、皇帝之號非所敢聞、且可稱居攝趙天王、以副天人之望。」於是赦其境内、改年曰建武。以 夔安 爲侍中・太尉・守尚書令、郭殷爲司空、韓晞爲尚書左僕射、魏檠・馮莫・張崇・曹顯爲尚書、申鍾爲侍中、郎闔爲光祿大夫、王波爲中書令、文武封拜各有差。立其子邃爲太子。
(2-i)	『晋書』卷一百六 石季龍 載記上 ³⁶⁾	其太保 夔安 等文武五百九人勸季龍稱尊號、安等方入而庭燎油灌下盤、死者七人。季龍惡之、大怒、斬成公段于閭闔門。
(2-j)	『晋書』卷一百六 石季龍 載記上	夔安 等又勸進曰「臣等謹案大趙水德、玄龜者、水之精也。玉者、石之寶也。分之數以象七政、寸之紀以準四極。昊天成命、不可久違。輒下史官擇吉日、具禮儀、謹昧死上皇帝尊號。」季龍下書曰「過相褒美、猥見推逼、覽增忝然、非所望也、其亟止茲議。今東作告始、自非京城内外、皆不得表慶。」
(2-k)	『晋書』卷一百六 石季龍 載記上 ³⁷⁾	以 夔安 爲征討大都督、統五將步騎七萬寇荆揚北鄙。石閔敗王師于沔陰、將軍蔡懷死之。宣將朱保又敗王師于白石、將軍鄭豹・談玄・郝莊・隨相・蔡熊皆遇害。季龍將張賀度攻陷邾城、敗晉將毛寶于邾西、死者萬餘人。 夔安 進據胡亭、晉將軍黃沖・歷陽太守鄭進皆降之。安於是掠七萬戶而還。
(2-l)	『宋書』卷二十四 天文志	咸康六年三月甲寅、熒惑從行犯太微上將星。占曰「上將憂。」四月丁丑、熒惑犯右執法。占曰「執法者憂。」六月乙亥、月犯牽牛中央星。占曰「大將憂。」是時尚書令何充爲執法、有譴欲避其咎、明年、求爲中書令。建元二年、庾冰薨、皆大將執政之應也。是歲正月、征西將軍庾亮薨。三月、而熒惑犯上將。九月、石虎大將 夔安 死。庾冰後積年方薨。豈冰能修德、移禍於 夔安 乎。

(3) 支雄		
番号	史料	記事
(3-a)	『元和姓纂』卷二 支氏条	石趙司空 支雄 、傳云、其先月支人也。
(3-b)	『晋書』卷一百四 石勒載 記上 ³⁸⁾	元海授勒安東大將軍・開府、置左右長史・司馬・從事中郎。進軍攻鉅鹿・常山、害二郡守將。陷冀州郡縣堡壁百餘、衆至十餘萬、其衣冠人物集爲君子營。乃引張賓爲謀主、始署軍功曹、以刁膺・張敬爲股肱、 夔安 ・孔萇爲爪牙、 支雄 ・呼延莫・王陽・桃豹・遼明・吳豫等爲將率。

(3-c)	『晋書』卷一百四 石勒載記上	勒於葛陂繕室宇、課農造舟、將寇建鄴。會霖雨歷三月不止、元帝使諸將率江南之衆大集壽春、勒軍中飢疫死者太半。檄書朝夕繼至、勒會諸將計之。右長史刁膺諫勒先送款於帝、求掃平河朔、待軍退之後徐更計之。勒愀然長嘯。中堅 夔安 勸勒就高避水、勒曰「將軍何其怯乎。」孔萇· 支雄 等三十餘將進曰「及吳軍未集、萇等請各將三百步卒、乘船三十餘道、夜登其城、斬吳將頭、得其城、食其倉米。今年要當破丹楊、定江南、盡生縛取司馬家兒輩。」勒笑曰「是勇將之計也。」各賜鎧馬一匹。
(3-d)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ³⁹⁾	行達東燕、聞汲郡向冰有衆數千、壁于枋頭、勒將於棘津北渡、懼冰邀之、會諸將問計。張賓進曰「如聞冰船盡在瀆中、未上枋內、可簡壯勇者千人、詭道潛渡、襲取其船、以濟大軍。大軍既濟、冰必可擒也。」勒從之、使 支雄 ·孔萇等從文石津縛筏潛渡、勒引其衆自酸棗向棘津。冰聞勒軍至、始欲內其船。會雄等已渡、屯其壘門、下船三十餘艘以濟其軍、令主簿鮮于豐挑戰、設三伏以待之。冰怒、乃出軍、將戰、而三伏齊發、夾擊攻之、又因其資、軍遂豐振。長驅寇鄴、攻北中郎將劉演于三臺。演部將臨深·牟穆等率衆數萬降于勒。
(3-e)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ⁴⁰⁾	廣平游綸·張豺擁衆數萬、受王浚假署、保據苑鄉。勒使 夔安 · 支雄 等七將攻之、破其外壘。浚遣督護王昌及鮮卑段就六眷·末柁·匹碑等部衆五萬餘以討勒。
(3-f)	『晋書』卷一百四 石勒載記上	勒將 支雄 攻劉演於廩丘、爲演所敗。演遣其將韓弘·潘良襲頓丘、斬勒所署太守邵攀。 支雄 追擊弘等、害潘良于廩丘。劉琨遣樂平太守焦球攻勒常山、斬其太守邢泰。琨司馬溫嶠西討山胡、勒將 遼明 要之、敗嶠于潞城。
(3-g)	『晋書』卷一百四 石勒載記上	使石季龍襲乞活王平于梁城、敗績而歸。又攻劉演于廩丘。 支雄 · 遼明 擊甯黑于東武陽、陷之、黑赴河而死、徙其衆萬餘于襄國。邵續使文鴛救演、季龍退止廬關津避之、文鴛弗能進、屯于景亭。
(3-h)	『晋書』卷一百五 石勒載記下 ⁴¹⁾	太興二年、勒偽稱趙王、赦殊死已下、均百姓田租之半、賜孝悌力田死義之孤帛各有差、孤老鰥寡穀人三石、大酺七日。依春秋列國·漢初侯王每世稱元、改稱趙王元年。始建社稷、立宗廟、營東西宮。署從事中郎裴憲·參軍傅暢·杜嘏並領經學祭酒、參軍續咸·庾景爲律學祭酒、任播·崔潛爲史學祭酒。中壘 支雄 ·遊擊 王陽 並領門臣祭酒、專明胡人辭訟、以張離·張良·劉羣·劉謨等爲門生主書、司典胡人出內、重其禁法、不得侮易衣冠華族。號胡爲國人。

(3-i)	『晋書』卷一百六 石季龍載記上 ⁴²⁾	季龍將伐遼西鮮卑段遼、募有勇力者三萬人、皆拜龍騰中郎。遼遣從弟屈雲襲幽州、刺史李孟退奔易京。季龍以 桃豹 爲橫海將軍、王華爲渡遼將軍、統舟師十萬出漂渝津、 支雄 爲龍驤大將軍、姚弋仲爲冠軍將軍、統步騎十萬爲前鋒、以伐段遼。季龍衆次金臺、 支雄 長驅入薊、遼漁陽太守馬鮪・代相張牧・北平相陽裕・上谷相侯龕等四十餘城並率衆降于季龍。 支雄 攻安次、斬其部大夫那樓奇。遼懼、棄令支、奔于密雲山。遼左右長史劉羣・盧諶・司馬崔悅等封其府庫、遣使請降。
(3-j)	支成墓誌 ⁴³⁾	後趙司空・始安郡公曰雄、瑯邪人也。
(3-k)	支光墓誌 ⁴⁴⁾	公諱光、字平、其先瑯邪人。後趙司空・始安郡公曰 雄 七世孫也。
(3-l)	『廣韻』上平声 支条	後趙錄有司空支雄。

(5) 吳豫		
番号	史料	記事
(5-a)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ⁴⁵⁾	元海授勒安東大將軍・開府、置左右長史・司馬・從事中郎。進軍攻鉅鹿・常山、害二郡守將。陷冀州郡縣堡壁百餘、衆至十餘萬、其衣冠人物集爲君子營。乃引張賓爲謀主、始署軍功曹、以刁膺・張敬爲股肱、 夔安 ・孔萇爲爪牙、 支雄 ・呼延莫・王陽・ 桃豹 ・遼明・吳豫等爲將率。

(7) 桃豹		
番号	史料	記事
(7-a)	『太平御覽』卷三九一 人事部三二 笑所引『十六国春秋』後趙錄	桃豹 字安步、范陽人。少時以膽勇騎射稱、嘗攘臂大言曰「大丈夫遭遇魏太祖、不封萬戶侯位上將者、非丈夫也。」時類笑之、 豹 罵言「爾鼠子輩、安知君子豹變之志乎。」後起中原、 豹 爲十八騎之雄、事勒甚恭。
(7-b)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ⁴⁶⁾	元海授勒安東大將軍・開府、置左右長史・司馬・從事中郎。進軍攻鉅鹿・常山、害二郡守將。陷冀州郡縣堡壁百餘、衆至十餘萬、其衣冠人物集爲君子營。乃引張賓爲謀主、始署軍功曹、以刁膺・張敬爲股肱、 夔安 ・孔萇爲爪牙、 支雄 ・呼延莫・王陽・ 桃豹 ・遼明・吳豫等爲將率。
(7-c)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ⁴⁷⁾	建興元年、石季龍攻鄴三臺、鄴潰、劉演奔于廩丘、將軍謝胥・田青・郎牧等率三臺流人降于勒、勒以 桃豹 爲魏郡太守以撫之。
(7-d)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ⁴⁸⁾	桃豹 至蓬關、祖逖退如淮南。徙陳川部衆五千餘戶于廣宗。
(7-e)	『晋書』卷六 元帝紀	(太興二年)冬十月、平北將軍祖逖使督護陳超襲石勒將 桃豹 、超敗、沒於陣。

(7-f)	『晋書』卷六十二 祖逖 傳 ⁴⁹⁾	李頭之討樊雅也、力戰有勳。逖時獲雅駿馬、頭甚欲之而不敢言、逖知其意、遂與之。頭感逖恩遇、每歎曰「若得此人爲主、吾死無恨。」川聞而怒、遂殺頭。頭親黨馮寵率其屬四百人歸于逖、川益怒、遣將魏碩掠豫州諸郡、大獲子女車馬。逖遣將軍衛策邀擊於谷水、盡獲所掠者、皆令歸本、軍無私焉。川大懼、遂以衆附石勒。逖率衆伐川、石季龍領兵五萬救川、逖設奇以擊之、季龍大敗、收兵掠豫州、徙陳川還襄國、留 桃豹 等守川故城、住西臺。逖遣將韓潛等鎮東臺。同一大城、賊從南門出入放牧、逖軍開東門、相守四旬。逖以布囊盛土如米狀、使千餘人運上臺、又令數人擔米、偽爲疲極而息于道、賊果逐之、皆棄擔而走。賊既獲米、謂逖士衆豐飽、而胡戎饑久、益懼、無復膽氣。石勒將劉夜堂以驢千頭運糧以饋 桃豹 、逖遣韓潛・馮鐵等追擊於汴水、盡獲之。 豹 宵遁、退據東燕城、逖使潛進屯封丘以逼之。
(7-g)	『晋書』卷一百五 石勒載 記下 ⁵⁰⁾	劉曜敗季龍于高候、遂圍洛陽。勒滎陽太守尹矩・野王太守張進等皆降之、襄國大震。勒將親救洛陽、左右長史・司馬 郭敖 ・程遐等固諫曰「劉曜乘勝雄盛、難與爭鋒、金墉糧豐、攻之未可卒拔。曜懸軍千里、勢不支久。不可親動、動無萬全、大業去矣。」勒大怒、按劍叱遐等出。於是赦徐光、召而謂之曰「劉曜乘高候之勢、圍守洛陽、庸人之情皆謂其鋒不可當也。然曜帶甲十萬、攻一城而百日不克、師老卒殆、以我初銳擊之、可一戰而擒。若洛陽不守、曜必送死冀州、自河已北、席卷南向、吾事去矣。程遐等不欲吾親行、卿以爲何如。」光對曰「劉曜乘高候之勢而不能進臨襄國、更守金墉、此其無能爲也。懸軍三時、亡攻戰之利、若鸞旗親駕、必望旌奔敗。定天下之計、在今一舉。今此機會、所謂天授、授而弗應、禍之攸集。」勒笑曰「光之言是也。」佛圖澄亦謂勒曰「大軍若出、必擒劉曜。」勒尤悅、使內外戒嚴、有諫者斬。命石堪・石聰及豫州刺史 桃豹 等各統見衆會滎陽、使石季龍進據石門、以左衛石邃都督中軍事、勒統步騎四萬赴金墉、濟自大碣。
(7-h)	『晋書』卷一百六 石季龍 載記上 ⁵¹⁾	季龍將伐遼西鮮卑段遼、募有勇力者三萬人、皆拜龍騰中郎。遼遣從弟屈雲襲幽州、刺史李孟退奔易京。季龍以 桃豹 爲橫海將軍、王華爲渡遼將軍、統舟師十萬出漂渝津、 支雄 爲龍驤大將軍、姚弋仲爲冠軍將軍、統步騎十萬爲前鋒、以伐段遼。季龍衆次金臺、 支雄 長驅入薊、遼漁陽太守馬鮪・代相張牧・北平相陽裕・上谷相侯龕等四十餘城並率衆降于季龍。 支雄 攻安次、斬其部大夫那樓奇。遼懼、棄令支、奔于密雲山。遼左右長史劉羣・盧諶・司馬崔悅等封其府庫、遣使請降。
(7-i)	『資治通鑑』卷九十六 成 帝咸康五（三三九）年条	十二月、丁丑、趙太保 桃豹 卒。

(7-j)	『晋書』卷一百二十五 馮跋載記馮素弗附伝	跋之偽業、素弗所建也。及爲宰輔、謙虛恭慎、非禮不動、雖厮養之賤、皆與之抗禮。車服屋宇、務於儉約、修己率下、百僚憚之。初爲京尹。及鎮營丘、百姓歌之。嘗謂韓業曰「君前既不顧、今將自取、何如。」業拜而陳謝。素弗曰「既往之事、豈復與君計之。」然待業彌厚。好存亡繼絕、申拔舊門、問侍中陽哲曰「秦趙勳臣子弟今何在乎。」哲曰「皆在中州、惟 桃豹 孫鮮在焉。」素弗召爲左常侍、論者歸其有宰衡之度。
-------	----------------------	---

(8) 遼明		
番号	史料	記事
(8-a)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ⁵²⁾	元海授勒安東大將軍・開府、置左右長史・司馬・從事中郎。進軍攻鉅鹿・常山、害二郡守將。陷冀州郡縣堡壁百餘、衆至十餘萬、其衣冠人物集爲君子營。乃引張賓爲謀主、始署軍功曹、以刁膺・張敬爲股肱、 夔安 ・孔萇爲爪牙、 支雄 ・呼延莫・ 王陽 ・ 桃豹 ・ 遼明 ・吳豫等爲將率。
(8-b)	『晋書』卷一百四 石勒載記上	勒將支雄攻劉演於廩丘、爲演所敗。演遣其將韓弘・潘良襲頓丘、斬勒所署太守邵攀。 支雄 追擊弘等、害潘良于廩丘。劉琨遣樂平太守焦球攻勒常山、斬其太守邢泰。琨司馬溫嶠西討山胡、勒將 遼明 要之、敗嶠于潞城。
(8-c)	『晋書』卷一百四 石勒載記上	使石季龍襲乞活王平于梁城、敗績而歸。又攻劉演于廩丘。 支雄 ・ 遼明 擊甯黑于東武陽、陷之、黑赴河而死、徙其衆萬餘于襄國。邵續使文鴛救演、季龍退止盧關津避之、文鴛弗能進、屯于景亭。
(8-d)	『晋書』卷一百四 石勒載記上	勒將陳午以浚儀叛于勒。 遼明 攻甯黑于茌平、降之、因破東燕酸棗而還、徙降人二萬餘戶于襄國。勒使其將葛薄寇濮陽、陷之、害太守韓弘。
(8-e)	『晋書』卷一百六 石季龍載記上 ⁵³⁾	增置女官二十四等、東宮十有二等、諸公侯七十餘國皆爲置女官九等。先是、大發百姓女二十已下十三已上三萬餘人、爲三等之第以分配之。郡縣要媚其旨、務於美淑、奪人婦者九千餘人。百姓妻有美色、豪勢因而脅之、率多自殺。石宣及諸公又私令采發者、亦垂一萬。總會鄴宮。季龍臨軒簡第諸女、大悅、封使者十二人皆爲列侯。自初發至鄴、諸殺其夫及奪而遣之縊死者三千餘人。荆・楚・揚・徐間流叛略盡、宰守坐不能綏懷、下獄誅者五十餘人。金紫光祿大夫 遼明 因侍切諫、季龍大怒、遣龍騰拉而殺之。自是朝臣杜口、相招爲祿仕而已。
(8-f)	『水經注』卷五 河水	東岸有故城、險帶長河、戴延之謂之 遼明壘 、周二十里、言遼明、石勒十八騎中之一、城因名焉。

(9) 郭敖		
番号	史料	記事
(9-a)	『晋書』卷一百五 石勒載記下 ⁵⁴⁾	劉曜敗季龍于高候、遂圍洛陽。勒滎陽太守尹矩・野王太守張進等皆降之、襄國大震。勒將親救洛陽、左右長史・司馬郭敖・程遐等固諫曰「劉曜乘勝雄盛、難與爭鋒、金墉糧豐、攻之未可卒拔。曜懸軍千里、勢不支久。不可親動、動無萬全、大業去矣。」勒大怒、按劍叱遐等出。於是赦徐光、召而謂之曰「劉曜乘高候之勢、圍守洛陽、庸人之情皆謂其鋒不可當也。然曜帶甲十萬、攻一城而百日不克、師老卒殆、以我初銳擊之、可一戰而擒。若洛陽不守、曜必送死冀州、自河已北、席卷南向、吾事去矣。程遐等不欲吾親行、卿以爲何如。」光對曰「劉曜乘高候之勢而不能進臨襄國、更守金墉、此其無能爲也。懸軍三時、亡攻戰之利、若鸞旗親駕、必望旌奔敗。定天下之計、在今一舉。今此機會、所謂天授、授而弗應、禍之攸集。」勒笑曰「光之言是也。」佛圖澄亦謂勒曰「大軍若出、必擒劉曜。」勒尤悅、使內外戒嚴、有諫者斬。命石堪・石聰及豫州刺史桃豹等各統見衆會滎陽、使石季龍進據石門、以左衛石邃都督中軍事、勒統步騎四萬赴金墉、濟自大碣。
(9-b)	『晋書』卷一百五 石勒載記下 ⁵⁵⁾	勒羣臣議以勒功業既隆、祥符並萃、宜時革徽號以答乾坤之望、於是石季龍等奉皇帝璽綬、上尊號于勒、勒弗許。羣臣固請、勒乃以咸和五年僭號趙天王、行皇帝事。尊其祖邪曰宣王、父周曰元王。立其妻劉氏爲王后、世子弘爲太子。署其子宏爲持節・散騎常侍・都督中外諸軍事・驃騎大將軍・大單于、封秦王。左衛將軍斌太原王。小子恢爲輔國將軍・南陽王。中山公季龍爲太尉・守尚書令・中山王。石生河東王。石堪彭城王。以季龍子邃爲冀州刺史、封齊王、加散騎常侍・武衛將軍。宣左將軍。挺侍中・梁王。署左長史郭敖爲尚書左僕射、右長史程遐爲右僕射・領吏部尚書、左司馬夔安・右司馬郭殷・從事中郎李鳳・前郎中令裴憲爲尚書、署參軍事徐光爲中書令・領祕書監。論功封爵、開國郡公文武二十一人、侯二十四人、縣公二十六人、侯二十二人、其餘文武各有差。

(9-c)	『晋書』卷一百五 石勒載 記下石弘附伝 ⁵⁶⁾	郭權以生敗、據上邽以歸順、詔以權爲鎮西將軍・秦州刺史、於是京兆・新平・扶風・馮翊・北地皆應之。弘鎮西石廣與權戰、敗績。季龍遣郭敖及其子斌等率步騎四萬討之、次于華陰。上邽豪族害權以降。徙秦州三萬餘戶于青・并二州諸郡。南氏楊難敵等送任通和。長安陳良夫奔于黑羌、招誘北羌四角王薄句大等擾北地・馮翊、與石斌相持。石韜等率騎擒句大之後、與斌夾擊、敗之、句大奔于馬蘭山。郭敖等懸軍追北、爲羌所敗、死者十七八。斌等收軍還于三城。季龍聞而大怒、遣使殺郭敖。石宏有怨言、季龍幽之。
-------	---------------------------------------	---

(10) 劉微		
番号	史料	記事
(10-a)	『晋書』卷一百五 石勒載 記下 ⁵⁷⁾	又遣季龍統中外步騎四萬討曹嶷。先是、嶷議欲徙海中、保根余山、會疾疫甚、計未及就。季龍進兵圍廣固、東萊太守劉巴・長廣太守呂披皆以郡降。以石他爲征東將軍、擊羌胡于河西。左軍石挺濟師于廣固、曹嶷降、送于襄國。勒害之、坑其衆三萬。季龍將盡殺嶷衆、其青州刺史劉微曰「今留微、使牧人也。無人焉牧、微將歸矣。」季龍乃留男女七百日配微、鎮廣固。青州諸郡縣壘壁盡陷。
(10-b)	『晋書』卷一百五 石勒載 記下石弘附伝	弘字大雅、勒之第二子也。幼有孝行、以恭謙自守、受經於杜嘏、誦律於續咸。勒曰「今世非承平、不可專以文業教也。」於是使劉微・任播授以兵書、王陽教之擊刺。立爲世子、領中領軍、尋署衛將軍、使領開府辟召、後鎮鄴。
(10-c)	『晋書』卷七 成帝本紀 ⁵⁸⁾	(咸和五年)夏五月、旱、且飢疫。乙卯、太尉陶侃擒郭默于尋陽、斬之。石勒將劉微寇南沙、都尉許儒遇害、進入海虞。
(10-d)	『晋書』卷七 成帝本紀 ⁵⁹⁾	(咸和)六年春正月癸巳、劉微復寇婁縣、遂掠武進。乙未、進司空郗鑒都督吳國諸軍事。戊午、以運漕不繼、發王公已下千餘丁、各運米六斛。
(10-e)	『晋書』卷八十八 桑虞伝	虞諸兄仕于石勒之世、咸登顯位、惟虞恥臣非類、陰欲避地海東、會丁母憂、遂止。哀毀骨立、廬于墓側。五年後、石勒以爲武城令。虞以密邇黃河、去海微近、將申前志、欣然就職。石季龍太守劉微甚器重之、微遷青州刺史、請虞爲長史、帶祝阿郡。微遇疾還鄴、令虞監行州府屬。
(10-f)	敦煌出土 p.2586『晋紀』 ⁶⁰⁾	晋人則程遐、徐光、朱表、韓攬、郭敬、石生、劉微。

(13) 呼延莫		
番号	史料	記事
(13-a)	『晋書』卷一百四 石勒載記上 ⁶¹⁾	元海授勒安東大將軍・開府、置左右長史・司馬・從事中郎。進軍攻鉅鹿・常山、害二郡守將。陷冀州郡縣堡壁百餘、衆至十餘萬、其衣冠人物集爲君子營。乃引張賓爲謀主、始署軍功曹、以刁膺・張敬爲股肱、 夔安 ・孔萇爲爪牙、 支雄 ・ 呼延莫 ・ 王陽 ・ 桃豹 ・ 遼明 ・ 吳豫 等爲將率。

(14) 郭黑略		
番号	史料	記事
(14-a)	『晋書』卷九十五 仏図澄伝 ⁶²⁾	及洛中寇亂、乃潛草野以觀變。石勒屯兵葛陂、專行殺戮、沙門遇害者甚衆。澄投勒大將軍 郭黑略 家、 黑略 每從勒征伐、輒豫克勝負、勒疑而問曰「孤不覺卿有出衆智謀、而每知軍行吉凶何也。」 黑略 曰「將軍天挺神武、幽靈所助、有一沙門智術非常、云將軍當略有區夏、己應爲師。臣前後所白、皆其言也。」勒召澄、試以道術。澄即取鉢盛水、燒香呪之、須臾鉢中生青蓮花、光色曜日、勒由此信之。
(14-b)	『晋書』卷九十五 仏図澄伝 ⁶³⁾	後 郭黑略 將兵征長安北山羌、墮羌伏中。時澄在堂上坐、慘然改容曰「郭公今有厄。」乃唱云「衆僧祝願。」澄又自祝願。須臾、更曰「若東南出者活、餘向者則困。」復更祝願。有頃、曰「脫矣。」後月餘、 黑略 還、自說墜羌圍中、東南走、馬乏、正遇帳下人、推馬與之曰「公乘此馬、小人乘公馬、濟與不濟、命也。」 略 得其馬、故獲免。推檢時日、正是澄祝願時也。

(15) 張越		
番号	史料	記事
(15-a)	『晋書』卷一百四 石勒載記上	勒姊夫廣威 張越 與諸將蒯博、勒親臨觀之。越戲言忤勒、勒大怒、叱力士折其脛而殺之。

(17) 趙鹿		
番号	史料	記事
(17-a)	『晋書』卷一百七 石季龍載記下石鑒附伝 ⁶⁴⁾	太宰 趙鹿 ・太尉張舉・中軍張春・光祿石岳・撫軍石寧・武衛張季及諸公侯・卿・校・龍騰等萬餘人出奔襄國。石琨奔據冀州、撫軍張沈屯滏口、張賀度據石瀆、建義段勤據黎陽、寧南楊羣屯桑壁、劉國據陽城、段龕據陳留、姚弋仲據混橋、苻洪據枋頭、衆各數萬。

(17-b)	『晋書』卷一百七 石季龍載記下冉閔附伝 ⁶⁵⁾	石祗使劉顯帥衆七萬攻鄴。時閔潛還、莫有知者、内外兇兇、皆謂閔已沒矣。射聲校尉張艾勸閔親郊、以安衆心、閔從之、訛言乃止。劉顯次于明光宮、去鄴二十三里。閔懼、召衛將軍王泰議之。泰患其謀之不從、辭以瘡甚。閔親臨問之、固稱疾篤。閔怒、還宮、顧謂左右曰「巴奴、乃公豈假汝爲命邪。要將先滅羣胡、却斬王泰。」於是盡衆而戰、大敗顯軍、追奔及于陽平、斬首三萬餘級。顯懼、密使請降、求殺祗爲效、閔振旅而歸。會有告王泰招集秦人、將奔關中、閔怒、誅泰、夷其三族。劉顯果殺祗及其太宰趙鹿等十餘人、傳首于鄴、送質請命。驃騎石寧奔于柏人。閔命焚祗首于通衢。
--------	------------------------------------	---

(18) 支屈六		
番号	史料	記事
(18-a)	『古今姓氏書弁証』卷三支氏	其先月支胡人、後爲胡氏。石勒十八騎中有支屈六。唐有感化軍節度使支祥。宋有蘓州吳縣人支詠。

注

- 1) 本論では、便宜的に非漢族を総称する呼称として「胡族」を用いる。
- 2) 谷川一九九八参照。
- 3) 谷川一九七〇、谷川二〇〇八等参照。
- 4) 内藤一九六九参照。
- 5) 杉山二〇一一参照。
- 6) 川本二〇〇五参照。
- 7) 附言すれば、漢帝国の限界を踏破しきれずに崩壊してしまった西晋帝国を超克するすがたも、五胡諸国には存在するであろう。
- 8) 石勒の評伝として李二〇一一があり、他にも陳勇二〇〇九、陳琳国二〇一〇等の基礎的研究がある。また仏教の観点から見た研究として高橋二〇一〇がある。他にも後趙全体に考察を加えたものとして、雷一九九四や谷川一九九八等がある。
- 9) この十八騎は、同時代的に呼称されたものか、後世のある種「伝説」として結成されたものかは判然としないが、少なくとも後趙の歴史を記したほぼ同時代の歴史書には、十八騎の名称は存在しており、ある程度同時代的な呼称として認知しても大過ないだろう。
- 10) 『魏書』卷九十五 羯胡石勒伝も同様の記事有り。所属者の異同は見当たらない。注11も参照。また、『太平御覧』卷一百二十 偏霸部四 後趙石勒 所引『十六国春秋』後趙録は「王陽・夔安等十八騎」とする。
- 11) 『魏書』卷九十五 羯胡石勒伝は姚豹とするが、他の史料は全て桃豹としているため、桃豹が正しいのであろう。中華書局版『魏書』校勘記も参照。
- 12) 『晋書』卷一百四 石勒載記上
遂招集王陽・夔安・支雄・冀保・吳豫・劉膺・桃豹・遼明等八騎爲羣盜。後郭敖・劉微・劉寶・張暄僕・呼延莫・郭黑略・張越・孔豚・趙鹿・支屈六等又赴之、號爲十八騎。
- 13) かかる対立については、小野二〇一四も参照。
- 14) 死後に贈官された可能性もあるが、死後の贈官であっても高い官位を受領できた事実を重視したい。以下、十八騎の任官状況についての理解は全て同様とする。なお、混乱する社会情勢を考慮すれば、五胡諸国の官職の職掌は、必ずしもモデルとなった魏晋王朝のそれと一致しないかもしれない。しかし、そうであれば却って「序列」を示すための官職の機能は残されていたと思われる。職掌もあやふやで、序列も明

確でないのであれば、官職体系を用いる必要性がなくなるからだ。本論で太保等を高位と見做すのは、かかる論理に基づく。以下の官職理解についても同様である。

- 15) 『資治通鑑』 卷九十六 成帝咸康六 (三四〇) 年条
趙尚書令夔安卒。
- 16) 即ち、例えば羯の石勒は『魏書』 卷九十五 羯胡石勒伝は、表題の通り石勒が「羯胡」である事が明示されている。本稿の言う「明証を欠く」は、『魏書』の石勒の記述の様に、明確に特定種族と特定個人を結びつける史料を確認できない場合を言う。例えば劉膺について言うのであれば、「匈奴劉膺」なる記述乃至彼の近親者が匈奴である明確な記述が確認できないという事である。以下、本稿で「明証を欠く」と書いた場合は、全て同様の史料状況を示している。
- 17) 『晋書』 卷六十 索靖伝に劉曜の下にいる日逐王呼延莫が確認できるが、時期的に不自然であり、なおかつ王たる呼延莫が盗賊となるのは考え難い。よって両者は別人だろう。
- 18) 『晋書』 卷九十五 仏図澄伝
佛圖澄、天竺人也。
なお『高僧伝』 卷九 仏図澄伝は「竺佛圖澄者。西域人也。」とする。
夔安については、(2-a) 参照。
- 19) 『太平御覧』 卷一百二十 偏霸部四 石弘 所引『十六国春秋』 後趙録
石弘、字大雅、勒第三子。母程夫人、右光祿遐之妹。
この程遐は、前掲 (10-f) から晋人だと確認できる。
- 20) 『太平御覧』 卷一百四十二 皇親部八 後趙石勒劉后 所引『三十国春秋』 後趙録
石勒劉皇后、侍中閏之妹、後部胡人也。
ここにある後部について、『資治通鑑』 卷八十五 惠帝永興元 (三〇四) 年条を見ると
後部人陳元達皆爲黃門郎、〔劉淵皆用漢官制。後部、即匈奴北部也、居新興。〕
とあり、〔 〕内の胡注によって匈奴である事が指摘されている。胡は匈奴も含むため、石勒の劉皇后についても、匈奴の人物と見做して大過ないだろう。
- 21) 『晋書』 卷一百四 石勒載記上
石季龍及張敬・張賓・左右司馬張屈六・程遐文武等一百二十九人上疏曰「(略)」
- 22) 『晋書校勘記』 卷五
張屈六即十八騎中支屈六。支張聲轉之誤。
- 23) 小野二〇一四参照。
- 24) 『資治通鑑』 卷八十七 懷帝永嘉三 (三〇九) 年条
漢安東大將軍石勒寇鉅鹿・常山、衆至十餘萬、集衣冠人物、別爲君子營。〔石勒起於胡羯餓隸而能如此、此其所以能跨有中原也。〕以趙郡張賓爲謀主、刁膺爲股肱、夔安・孔萇・支雄・桃豹・遼明爲爪牙。〔姓譜夔子之後、以國爲姓。後趙支雄傳云、其先、月支胡人也。桃、春秋魯邑、以邑爲姓。下曰古高士左伯桃之後。〕并州諸胡羯多從之。
- 25) 『資治通鑑』 卷九十一 元帝大興二 (三一九) 年条
- 26) 『資治通鑑』 卷九十三 成帝咸和元 (三二六) 年条
- 27) 『太平御覧』 卷三八五 兵部九〇 柳 所引『趙書』
- 28) 周一九八五は、敦煌出土 p.2586 に現れる「憂安」を夔安であるとし、胡族であると見做すが、明証を欠く。
- 29) 前掲注 24 『資治通鑑』 卷八十七 懷帝永嘉三 (三〇九) 年条
- 30) 『資治通鑑』 卷八十八 懷帝永嘉六 (三一二) 年条
- 31) 『資治通鑑』 卷八十八 懷帝永嘉六 (三一二) 年条
- 32) 『高僧伝』 卷九 仏図澄伝
- 33) 『資治通鑑』 卷九十四 成帝咸和五 (三三〇) 年条
- 34) 『資治通鑑』 卷九十五 成帝咸和八 (三三三) 年条
- 35) 『資治通鑑』 卷九十五 成帝咸和九 (三三四) 年条
- 36) 『資治通鑑』 卷九十五 成帝咸康三 (三三七) 年条

- 37) 『晋書』卷七 成帝本紀・『晋書』卷八十一 毛宝伝・『資治通鑑』卷九十六 成帝咸康五年条
- 38) 『資治通鑑』卷八十八 懷帝永嘉六(三一二)年条
- 39) 『資治通鑑』卷八十八 懷帝永嘉六(三一二)年条
- 40) 『資治通鑑』卷八十八 懷帝永嘉六(三一二)年条
- 41) 『資治通鑑』卷九十一 元帝大興二(三一九)年条
- 42) 『資治通鑑』卷九十六 成帝咸康四(三三八)年条
- 43) 『隋唐五代墓誌匯編』洛陽卷一四
- 44) 『隋唐五代墓誌匯編』洛陽卷一四
- 45) 前掲注 24 『資治通鑑』卷八十七 懷帝永嘉三(三〇九)年条
- 46) 前掲注 24 『資治通鑑』卷八十七 懷帝永嘉三(三〇九)年条
- 47) 『資治通鑑』卷八十八 愍帝建興元(三一三)年条
- 48) 『晋書』卷六十二 祖逖伝・『資治通鑑』卷九十一 元帝大興二(三一九)年条
- 49) 『資治通鑑』卷九十一 元帝大興三(三二〇)年条
- 50) 『資治通鑑』卷九十四 成帝咸康三(三二八)年条
- 51) 『資治通鑑』卷九十六 成帝咸康四(三二九)年条
- 52) 前掲注 24 『資治通鑑』卷八十七 懷帝永嘉三(三〇九)年条
- 53) 『資治通鑑』卷九十七 穆帝永和元(三四五)年条
- 54) 『資治通鑑』卷九十四 成帝咸康三(三二八)年条
- 55) 『資治通鑑』卷九十四 成帝咸和五(三三〇)年条
- 56) 『資治通鑑』卷九十五 成帝咸和九(三三四)年条
- 57) 『資治通鑑』卷九十二 明帝太寧元(三二三)年条
- 58) 『晋書』卷六十七 郗鑒伝・『資治通鑑』卷九十四 成帝咸和五(三三〇)年条
- 59) 『宋書』卷三十一 五行志・『資治通鑑』卷九十四 成帝咸和六(三三一)年条
- 60) 岩本二〇〇五は『晋陽秋』もしくは『晋中興書』の可能性を指摘し、郝二〇一三は『晋陽秋』とする。
- 61) 前掲注 24 『資治通鑑』卷八十七 懷帝永嘉三(三〇九)年条
- 62) 『高僧伝』卷九 竺仏図澄伝・『河朔訪古記』卷上。なお、『河朔訪古記』では大将とある。おそらく誤写であろうが、大將軍よりも大将の方が実情に合っていると思われる。
- 63) 『高僧伝』卷九 竺仏図澄伝
- 64) 『資治通鑑』卷九八 穆帝永和六(三五〇)年条は趙庶とする。趙庶はここにしか名前が確認できず、また太宰という高位に就いている事から考えると無名の人物であったとは考え難い。よって『晋書』に従う。
- 65) 『資治通鑑』卷九八 穆帝永和七(三五一)年条は趙庶とするが『晋書』に従う。前掲注 64 も参照。

参考文献

【日文】(著者五十音順)

- | | | |
|-------------------|------|--|
| 岩本篤志 | 二〇〇五 | 「敦煌・吐魯番発見「晋史」写本残卷考―『晋陽秋』と唐修『晋書』との関係を中心に―」『西北出土文献研究』二 |
| 小野響 | 二〇一四 | 「後趙における君主と軍事力―石虎即位以前を中心として―」『立命館史学』三五 |
| 郝春文(高田時雄監訳・山口正晃訳) | | |
| | 二〇一三 | 『よみがえる古文書―敦煌遺書』東方書店 |
| 川本芳昭 | 二〇〇五 | 『中華の崩壊と拡大』講談社 |
| 杉山正明 | 二〇一一 | 『遊牧民から見た世界史 増補版』日本経済新聞出版社 |
| 高橋亮介 | 二〇一〇 | 「後趙石勒の仏教受容について」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三二 |
| 谷川道雄 | 一九七〇 | 「拓跋国家の展開と貴族制の再編」『岩波講座世界歴史五 古代五』岩波書店 |
| ――― | 一九九八 | 『増補 隋唐帝国形成史論』筑摩書房(初出:一九七一年) |
| ――― | 二〇〇八 | 『隋唐世界帝国の形成』講談社(初出:一九七七年) |
| 内藤湖南 | 一九六九 | 『支那上古史』(『内藤湖南全集』一〇 筑摩書房所収、初出:一九四四年) |

【中文】（著者拼音順）

陳琳国	二〇一〇	『中古北族民族史探』商務印書館
陳勇	二〇〇九	『漢趙史論稿』商務印書館
唐長孺	二〇一一	『魏晉南北朝史論叢』中華書局（初出：一九五五年）
雷家驥	一九九四	「後趙文化適應及其兩制統治」『国立中正大学学報人文分冊』第五卷 第一期
李智文	二〇一一	『石勒評伝』国家図書館出版社
馬長寿	二〇〇六	『北狄与匈奴』広西師範大学出版社（初出：一九六二年）
温拓	二〇一六	「石弘即位之局与後趙的政治変革—兼論二石關係」『史志学刊』二〇一六年第二期
姚薇元	二〇〇七	『北朝胡姓考（修訂本）』中華書局（初出：一九六二）
周一良	一九八五	『魏晉南北朝史札記』中華書局

【附記】 本論の内容は、二〇一七年度立命館史学会大会の発表を加筆修正したものである。会場において、多くの方から御指摘を賜った。この場を借りて御礼申し上げたい。

（本学大学院博士後期課程）